

5～6世紀、江南に成立した劉宋・南斉・梁・陳などの四王朝をまとめて南朝という。南朝のうち南斉・梁では、周公が周の制度について記したとされる儒学の経典『周礼』にもとづき儀礼が整備された。南斉・梁の儀礼整備と『周礼』の関係について、従来の研究では以下のことが明らかにされている。すなわち南斉の第二代皇帝である武帝のとき『周礼』にもとづく五種類の儀礼（五礼）を整備しようとしたが未完に終わったこと、その後、『周礼』にもとづく儀礼整備は梁の初代皇帝である武帝のときに完成すること。本報告はこうした南斉・梁における『周礼』の受容について、以下の二点を論じるものである。

①劉宋では、それまで行宮の地に過ぎなかった建康で国家儀礼が整備されるようになった。

その後、南斉の第五代皇帝である明帝は、建武2年（495）、『周礼』にもとづき立て続けに儀礼を整備した。それは北魏の洛陽遷都の翌年、みずからの傍系継承を正統化しようとしたところに大きな特徴があった。

②梁武帝は雅楽の曲名変更、五経博士の抜擢など『周礼』にもとづく儀礼整備をさらに推し進めた。皇子の一人である元帝が『周礼』をはじめとする三礼に詳しい賀革を生涯の師とし武帝を周公になぞらえたのは、そうした儀礼整備を背景とするものであった。

一方、同時代の北魏・北周でも『周礼』にもとづき儀礼が整備され、やがて北朝を受けた隋唐が中国の正統王朝となる。南北の動きは、騎馬遊牧民と漢族の対立・融合によって生まれた制度・思想が『周礼』を用いて正統化されている点で共通している。この時代の『周礼』は、もともと中国の周辺あるいは地方の制度・思想に過ぎなかったものを王朝の「伝統文化」に変換する役割を担っていたのである。こうした既存の枠組みを利用・展開した国家の再編、中心の創造は、当該時代の中国にとどまらず、ヨーロッパの古代末期にも見られる歴史的な普遍性をもつ現象であったと考えられる。